再歩

～再建までのみち～

宮本（みやもと） 昌則（よしのり） さん（77） 和子（かずこ） さん（妻）
佳枝（よしえ） さん（子）

行政区：馬　水　南

いつも前向きで、笑い声の絶えない宮本家

まだまだ風が冷たい3月上旬、春の温かさを運んできたかのようなご家族に会うことができました。震災前と同じ場所に自宅を再建した宮本昌則さんご家族です。

あれだけの大きな地震に見舞われても、「避難生活は楽しかった。家族だけだと気持ちが沈んでしまうけど、ご近所同士、悲愴感がなく笑顔があふれていました。いつも前向きでお互いに情報交換をしていたんですよ」と佳枝さんは笑顔で話します。

発災当時、近くのドラッグストアの駐車場に避難した宮本さん家族は、近所の人たちと隣り合わせで車を並べました。支援物資の配布情報の交換など、いつもの付き合いがここでも生かされました。その後しばらくは、広安小で避難生活を送りました。

築40年の32坪二階建ての自宅は、り災判定で全壊。基礎が破断しているとの検査結果を受け、最後まで悩んでいたという解体を決意しました。近所に大工さんが住んでいたことも、自宅再建への思いを後押ししました。

仮設住宅への入居が決まるまでは避難所から自宅に戻り、二階が下がり建具が動かない状態の中、枕元に携帯電話と非常持ち出し袋を置いて生活を送りました。

仮設団地に入居した後も、昌則さんは和子さんの実家のガソリンスタンドの店舗に自宅の障子を持ってきて、2部屋に仕切り寝泊まりしました。

自宅の再建には生活再建支援金、義援金、地震保険、老後の資金にと思っていた預貯金を充て、息子さんからも少し支援を受けました。また、佳枝さんは保険から捻出できるものを調べ上げるなど、家族で協力し合いました。

36・5坪の新しい家は3人には十分な広さです。大工さんが話をしっかり聞いてくれて、ほぼ思い通りの家ができたと言います。

でも、昌則さんには少し不満が・・・。

「建坪は震災前の家より広くなったはずですが、ちょっと狭くて自分の部屋に物が入りきれないんです」

「そうなんですよ。夫の要望は十分に聞いて設計してもらったはずなのに。実は（敷地内にあった）離れで夫の趣味のお茶をやるつもりだったんですが、新しい家を建てるには解体しなければならなかったんです。それで離れにあった荷物を新しい家に入れたものだから、以前より荷物が増えて部屋が狭くなってしまって」とすかさず和子さんが笑いながら説明してくれました。

「新築の家で安心感はあるんですが、まだ恐怖心もあるんですよ。他の地域で起こる地震も気になるんです。地震の恐怖はなかなか消えません」（佳枝さん）

これから昌則さんは、広安小と広安西小の放課後子ども教室で以前からやっていたそろばんの指導を再開します。趣味のカメラやお茶の道具はほとんど壊れてしまいましたが、裏千家のお茶も続けるつもりです。

以前からパン教室に通っていた和子さんは、パンを焼いてはご近所や友人に配って喜ばれています。これからも続けていくそうです。

大きな災害にあっても、いつも前向きで笑い声の絶えない宮本家。周りの空気を一瞬で温かくしてくれます。困難な時間を乗り越えたからこそ見習うべきところが多い宮本さん家族に、そっと背中を押してもらっているかのような、終始笑顔に満ちたインタビューとなりました。

和子さんが焼いたおいしいパンをいただき、昌則さんにたてていただいたお茶を一服。

結構なお点前でございました。

震災からやがて2年目を迎えます。再建に向かって一歩、一歩前進している人々のようすがうかがえる一方、まだまだ多くの人々が困難な問題を抱えているのが現状です。

町では、被災した全ての方が生活を再建するまで見守り続けます。

生活再建支援課
住まい再建支援係
☎289 - 1400